
物語とあたし

針鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語とあたし

【Nコード】

N0215E

【作者名】

針鼠

【あらすじ】

主人公がいなければ”物語”は始まらない。主人公と”物語”を忘れてしまった私は長靴を履いた三毛猫と出会う。”劇場”を通して様々な物語を見ることが私は段々と物語を思い出していく。果たして・・・私は”物語”を思い出せるのだろうか。そして・・・私の”物語”の主人公は一体誰なのだろうか。

はじまりの物語

「じじは、どじじ。」

気がついたら、真っ暗闇の中だった
私は、辺りを見渡した。
真っ暗闇だ

「ようこそ」

声がぽつりと聞こえてきた。
ぽうつと小さな光がぽつりぽつりについていく。
そして、現れたのは小さな舞台

そして——二本足で器用に立つ三毛猫

「猫……?」

「猫以外の”もの”でもございません」
くるくると手を回して丁寧にお辞儀をする。

「”にゃちし”は、長靴を履いた猫にございます」

「長……靴……」

息を飲んで私は、猫の足もとを見る．．．確かに長靴．．長靴を履いている。

「本当だ．．．」

「”にやちし”は、王子を探しているのでございます」
どこからか強いライトが当てられて舞台が明るくなった——木
で出来た貧相なお城が背景に建っている。

「王子を探しに東を旅したこともあれば北、南、西と流離い．．．

」

「さまざまな、国を見てまいりました」

「しかし、王子は何処にもいませんでした」

「．．．．．あなたは．．．王子ですか？」

「——私は、王子ではないわよ」

「では、何”もの”でございますか？」

私を見つめる長靴の猫——じつと琥珀色の大きな瞳で見つめられる。

そういえば、私．．．なんだっけ？

私は首を傾げた。

忘れてしまった。

あれ——私って”何”もの????

にやりと長靴の猫の瞳が細められた。

「おや、おや・・・お忘れに?・・・まさか、あなたも猫だとおっしゃいますな。ああ、ちなみに・・・」にやちし”は、猫以外の”ものの”でもありませんけどね」

なんだか馬鹿にされた気分だ。私はむっとして言った。

「忘れてなんかいいわよ・・・ちよつとだけ・・・忘れてるの・・・自分のこと」

少し間をおいて猫はぽんと手を叩き言った。

「では、あなたは王子かもしれません」

「違うわよ」

ここで私は即答する——だってあり得ないもん。王子は、男の

子がやるものでしょ?・・・女の子はもちろんお姫様。

「何故分かるのです?」

猫は少し可愛げに首を傾げて聞いてきた。

「分かるもん」

断言してやる。

「残念です。」にやちし”は王子がいなくとお話が進められないというのに・・・」

「お話が進められない?」

「だって”物語”は、主人公を中心として進められるでしょう?・・・王子がいなければ”にやちし”の出番が来ないんですよ」

「物語?」

「そうです。ここは、”劇場”。主人公がいなければ物語は止まっただまま・・・」

「劇場・・・」

さつきから私オウムみたいに猫の言葉を真似してる。いい加減頭がこんがらがって長い長い迷路の中を歩いてるみたいな錯覚に陥る。

「”にやちし”は、王子を探しながらこの”劇場”と”物語”を管理しているんです」

「どうです？・・・”物語”覗いてみますか？」

私は、首を振ろうとした——でも、止めた。だって何処にいけばいいか分からないもの。どうせいくところなんてないし・・・”物語”・・・興味がある。

「分かりました。ああ、ちなみに年の指定は御座いませんよ。それと、お喋りはしないで下さい。これは、あなたの”物語”ではありませんから・・・声を出しても・・・あなたは、登場人物にはなれないのです。ああ、ちなみに・・・”にやちし”は、猫以外の”もの”でもありませんけどね」

「分かった。訳わからないけど話さないわよ」

「では、では・・・まず始まるのは残酷な王子と見目美しい姫のお話です」

「古典的ね・・・」

何処からか霧が立ち込めた——白い靄の中に何かが建っている。

あれは——塔？

高い——高い塔・・・

そう、物語はここから始まる——

「さあ、はじまり。はじまり」

第一幕――王女と竜王子

竜王子と不幸な王女

誰も場所を知らない・・・どこか——遠い、遠い国のお話

勇敢な王子がいました。

王子は、勇敢でしたがそれと同時に傲慢で慈悲を知らない人でした。美しい容姿と勇敢な姿に誰もが王子を愛しました。

ある日——王子は、魔法使いから竜の話を聞きました。

竜を殺した者には永遠の命が授けられると——

しかし、最後に魔法使いは罪なき竜を殺せば恐ろしい呪いがかかると言いました。

しかし——王子は、魔法使いの話を最後まで聞きませんでした。

王子は、北へ向かいました。そこには、まだ百年ほどこしか生きていない若い竜がいました。

王子は、若い竜に毒を飲ませました。竜は倒れ苦しみました。王子はもちろん毒を治す薬をもっていました。竜は、王子に命乞いをしましたが、慈悲を知らない王子は聞き入れませんでした。罪なき竜を殺して王子は、永遠の命を手に入れました。

王子は、罪なき竜の首を国に持ち帰りました。王子は、罪なき竜を殺した事実をいわず、北の地で悪さをしていた竜を自分が懲らしめたと嘘をついて笑いました。

ある日――― 竜が国を襲いました。

大きな白い竜です。竜は、王子を見つけるといいました。

「お前が、北の竜を殺した者が―――」

王子は、胸を張って言いました。

「そうだ、私が北の竜を殺した」

大きな竜は、叫びました。その声は雲を引き裂き大地を震わせました。

「私は、世界で最初の竜だ。すべての竜の王といっても過言ではない…… お前は、罪なき私の息子に殺した。あまつ

さえ、命乞いをし誇りを失った哀れな息子をお前は殺した。お前は償わなくてはならない」

そついうと竜は、王子を醜い真つ黒い竜に変えた。

「醜いわが息子よ――― お前は罪を償わなければならない。傲慢で慈悲を知らないわが息子よ。お前が本当の慈悲を優しさを知るまでお前は醜い竜のまま暮らすがいい」

そついつて世界で最初の竜は空へと帰っていきました。

王子は嘆き悲しみました。

永遠の命を持ってしまったために死ぬことも叶わず永遠にこの姿で生きなければなりません。

王子は、それからも国を治めつづけました。

戦争をし、いくつもいくつも国を潰しました。戦争には勝ち続けましたが王子は満たされませんでした。王子は自分の醜い姿に呪いをこめつづけ咆え続けました。敵国から奪った美しい王女を妻にしましたが王子の飢えは満たされませんでした。いつしか、王子は飢えのために妻を食べてしまいました。

すると、不思議なことに一瞬飢えが満たされました。

それから、王子は満月の夜――王女を娶っては食らいました。

しかし――王子の飢えは満たされることはなく――王子

はいつしか皆から恐れられ

竜王子と呼ばれるようになりました。

――
今も竜王子は、飢えの為に王女を食らい自分の姿に呪いを込めつづけ咆え続けているそうです。

第1章

知恵も権力もある立派な王様がいました。

その王様には、美しい一人の后がいました。

后は、美しい王女を産み美しい名前をつけるとやがて死んでしまいました。

悲しみにくれた王は早くに母親を亡くした王女に悲しい思いはさせたくはないと高い高い塔の上に王女を住まわせました。

ある日のこと幼い王女は外の世界が気になって王様に聞きました。

「偉大なる王――私の尊敬するお父様、私はこの塔の外に出てみたいのです」

そういうと知恵も権力もある立派な王は言っのでした。

「いけない、いけない。今は、流行の病で外は危険だ。出てはいけないよ」

その言葉を聞いて姫は二年待ちました。

「偉大なる王――私の尊敬するお父様、私はこの塔の外に出てみたいのです」

そういうと知恵も権力もある立派な王は言っのでした。

「いけない、いけない。今は、洪水で外は危険だ。出てはいけないよ」

その言葉を聞いて姫は三年待ちました。

「偉大なる王」――私の尊敬するお父様、私はこの塔の外に出てみたいのです」

そういうと知恵も権力もある立派な王は言っのでした。

「いけない、いけない。今は、飢饉で外は危険だ。出てはいけないよ」

王女は、がつくりと肩を落しました。

もう、王女は年頃の娘になって美しい金の髪と白い肌を持ったそれはそれは美しい立派な姫となりました。王が、王女に外に出て欲しくないために嘘をついていることはもう知っていたのです。

高い高い塔で一人――王女は孤独でした。

母親である后がつけてくれた美しい名前も父王は忘れてしまっていたため誰も王女の名を呼ぶものはいませんでした。王女はいつも孤独で不幸でした。

ある日のこと――王女は、結婚することになりました。戦争があつたのです。

戦争があつたことも王女は知らず高い高い塔の上で一人住んでいたのです。

王は泣いています。

王女はどんなに慰めても悲しむ王を心配になって聞きました。

「偉大なる王」――私の尊敬するお父様、どうして悲しんでいるのですか？」

嘆く王は言いました。

「私が大切に高い高い塔の中で育てたお前が殺されてしまうからだよ」

王女は、首を傾げました。

「偉大なる王」――私の尊敬するお父様、どうして私は殺されてしまうのですか？」

なおも嘆く王は言いました。

「お前の結婚相手が竜だからだよ」

賢い王女は、驚きました。まさか、自分が竜と結婚するとは思わ

なかつたからです。

第2章

その日の夜——少女は初めて塔から出て月を見ました。

そして——初めて涙を流しました。

「夜の世界を照らす男神よ——父なる月よ——どうか、どうか・・・この声を聞いてくださいまし、私は明日竜王子の所へと向かいます。私はきつと殺されてしまえます。どうか、どうか助けてください」

そう言々と王女は美しい涙を一つ流しました。

その美しい涙に心を動かされたのか、月が王女に言いました。

「哀れな美しき王女よ。私の声を聞きなさい——竜王子は満月の夜、迎えた王女を食べてしまうだろう。だが、私には何もしてあげることが出来ない」

王女は、その話を聞いてまた美しい涙を一つ流しました。

その美しい涙に心を動かされたのか、また月が王女に言いました。

「哀れな美しき王女よ。私の声を聞きたまえ——竜王子にこう願いなさい。月と太陽の間に咲く花が欲しいと。きつと竜王子はあなたの最後の頼みといえは聞いてくれるでしょう」

王女は首を傾げました。しかし、月がそういうのできつと大丈夫なのでしょう。

最後に月がいました。

「貴方の知恵があればきつと乗り越えられるでしょう」

王女は月にお礼をいいました。

次の日王女は竜王子の待つ国へ向かいました。

満月が真上にあがる頃に王女は竜王子の国に着きました。

竜王子の国はそれはそれは豊かでその国の人々は美しい王女を出迎えました。

大人たちは嬉しそうに歌います。

—— 今宵も王女がやって来た

—— なんて美しい王女だろう

きつと今度は大丈夫 —— 立派な后になるでしょう。

それとも、一つ墓標が立つか ——

でも、大丈夫 —— また次の満月には新しい王女が来るのだから

子供たちが冷ややかに歌います。

—— 今宵も王女がやってきた

呪われし竜王子の後となるために ——

でも、なれるはずがない ——

今宵の満月の夜に ——

きつと王女は腹の中 ——

次の満月には新しい王女がくるだろう

王女は、城へつくなり美しいドレスに着替えさせられ寝室へと連れていかれました。

寝室には大きな天蓋のベッドがありました。大きな天蓋ベッドの上には大きな竜が悠々と寝転んでいました。

王女は、竜を始めてみたので最初見た時声を上げそうになりました。しかし、必死で抑えしつかり顔を上げ竜を見つめました。

竜は、感心したように言いました。

「ほお————我が忌まわしきこの姿を眼にしても悲鳴一つ————震えることなく立っていたのは何処の国の王女にもいなかったぞ」

王女は、笑みを見せながらゆっくりと近づきました。

「私の命を奪うお方————そして、この豊かな国の王であらせられるあなたに最後のお願いがございます」

竜は、長い尻尾を揺らしながら言いました。

「この私を恐れぬそなたの勇氣に答え特別に聞いてやろう————」

王女は、竜によく聞こえるように近づきました。

美しい王女は竜が恐ろしかったのですが、王女は勇氣を振り絞り言いました。

「はい、太陽と月の間に咲くといわれる花があるといます。私は昔から高い高い塔に住んでおりましたゆえ世界をしりません。ですから最後に見てみたいです」

竜は、目をピクリと動かして鼻をならした。

「勇氣のある王女よ————別の願いはないのか」
王女は首を振った。

「私の命を奪うお方————そして、この豊かな国の負うであらせら

れるあなた、これ以上の願いはありません」

「我が后となるものよ——そして命短き者——お前の願いとならば国一つとて月が地上に消える前に滅ぼしてやろう——

——我は王なるぞ？なんだって叶えてやろう。しかし、お前の言っている花を見たものは誰一人としない……そんな愚かな望みは止めよ。他の望みはないのか——」

「いいえ、ありません——」

王女はきっぱりと告げました。

「偉大なる夜の支配者——そしてこの国の王であられる方——貴方に出来ないことなどないはずです」

王女があまりにも熱心に言うので竜は仕方なく翼を広げた。

「我が后となるものよ——そして命短き者——月が大地に沈む前に帰ってくる。そして、我はお前を食らうだろう——」

そっくり残すと竜は、大きな翼を広げ空へ飛んでいきました。

第3章

竜は太陽と月の間へ向かいました。何しろ竜の翼は半日で世界を一周してしまうので太陽と月の間へ向かうのは簡単なことでした。竜は、空を飛びながら王女のことを考えていました。今まで生きてきて美しく勇気があるあんな王女を竜は見たことがありません。竜は、何故娘の願いを聞いてしまったのか自分でも分かりませんでした。今になって考えてみるとあの時食べてしまった方が良かったのかもしれない。

太陽と月の間に辿りつきました。そこには砂漠が広がっていて一輪の花が植わっていました。花は虹色に輝き今までに見たこともないような美しさを誇っていました。

竜は、花を引き抜こうとしました。すると、何処からともなくトカゲが出てきていました。

「どうか——どうか・・・お止めください。私はその花の蜜を吸って生きています。その花を採られてしまつては私はこの広大な砂漠で干からびて死んでしまいます」

とかげがあまりにも慌てふためいていうので竜は鼻で笑ってやりました。

「お前なんぞ、知るものか。私が欲しいといっているんだぞ、お前のような弱いものは干からびて死んでしまえ」

そついうと竜は翼を広げて飛んで行きました。

それから、月が沈む前に竜は王女の元へと帰ってきました。

「王女願いは叶えた。そなたを食べてしまつとしよう」

王女は困り果てました。竜は約束通り太陽と月の間に咲く花を持ってきたのです。かの花は虹色に輝いていました。王女は、花の美し

さに圧倒されました。賢い王女は少し考えて言いました。

「この世の果てに向かった素晴らしき竜——そしてこの国の王であらせられるあなた、この花は私のいった太陽と月の間に咲く花ではありませんわ」

竜は憤慨した。

「昼は間直に太陽に照らされ夜は月の光に照らされるせいで光り輝いているのです。その花は虹色のただの花——太陽と月の間に咲く花とは違います」

もちろんこんな花はない。

賢い王女は嘘を言いました。

もう日は完全に昇っています。竜は、王女が食べれずに怒りと悔しさで唸りました。

竜は、王女に自分がどんなに努力をして花を採ってきたのかを説明しました。

しかし、王女は泣いています。竜は、慌てました。

「勇気ある王女よ——何故泣く？」

王女は答えました。

「強く勇敢で——残酷なあなた、私のせいでその哀れなトカゲは死んでしまうと思っただけ悲しくて・・・」

竜は王女が泣いている理由がわかりませんでした。そして、段々怒りが湧いてきました。何しろこんなにも竜王子を困らせた者はいなかったので竜は怒り狂い王女を怒鳴りました。

「愚かな娘だ！！何を泣く必要がある！！かくも哀れなのはこの私だ！！この私なのだ！！！」

そして、竜はまた空へと飛んで行きました。

竜は、王女の涙が忘れられませんでした。そして、急にあのトカゲがどうなったのか気になりました。太陽と月の間の砂漠にトカゲは死んでいました。そして、竜は初めて後悔しました。

後悔とはなんと苦しいものなのでしょう。竜は胸を押さえて苦しみました。

そして、竜は一粒の涙を流しました。すると、竜の涙が湖となって砂漠を潤しました。竜が胸を掻き毟るほど鱗が剥がれ落ち大地に鱗が落ちるたびに緑が溢れました。

そのことを知った竜は自分の鱗を剥がし広大な砂漠を緑の平野に変えました。

竜は、鱗が剥がれ肉が見え血が見えもつと醜くなった自分を見ましたが何故だか怒りや憎しみはありませんでした。

そして、竜は空へとまた舞い戻りました。

王女は、泣いていました。竜は、王女にゆつくりと近づくと優しくいいました。

「心優しき王女よ——無垢なる娘よ・・・安心しろ、我の力で砂漠を緑の平野に変えた。砂漠の生き物は皆喜ぶであらう——死ぬものはいないだろう」

王女は顔を上げた。

「雄大な空の王——心広きお方・・・ではあのトカゲはどうでした・・・きつと喜んでいたのでしょう？」

竜は、少し考えていいました。何しろトカゲは死んでしまったのです。竜には、これ以上王女を苦しめることなど出来ませんでした。

「ああ——喜んでいたぞ。喜んでいた」

王女は、笑いました。竜はなんて美しい笑顔なんだろうと思いました。いままで、竜に笑いかける者などいなかったのです。

「本当に・・・ありがとう」

竜は初めてお礼を言われました。飢えなど何処かに行ってしまったって幸せな気持ちになりました。

しかし、次の満月には王女を食べてしまわなければなりません。

嫌駄目だ・・・王女を食べたくはない。初めて王子に迷いが生まれましたが直に飢えがやってきてそんな考えも吹き飛んでしまいました。

次の満月には必ず王女を食らおう。竜は、ほくそ笑みました。

第4章

王女がもう何も願わないように竜は王女に何か願いはないか聞きました。王女には何も願いはありませんでした。しかし、竜はなおも王女に聞きました。

「欲のなき若きものよ——無垢なる娘よ。お前には他の願いはないのか？」

王女は、首を振りしました。

「優しい人——この国で一番恐れられているあなた——ありません。私は、太陽と月の間にある花が欲しいのです」

「我はなんでも手に入れられるのだぞ——！！死ぬ前に贅沢をしたいと願わないのか？誰か憎い奴がいれば私が引き裂いてやろう。会いたいものがいれば連れてきてやろう」

そういつても王女は首を振り続けました。

「そなたは本当に変わった娘だ」

竜は、王女の頑固さに飽きました。二人で空を眺めているうちに竜はいいました。

「お前はきつと誰にでも愛されているのだろうな・・・私はいろいろな人間を見てきた。ある人間は私を恐れ殺そうとし、ある者は私を嘲り利用しようとした。まあ、もちろん皆食ろうてやったがな。人間とはそうであろう？嘲り人を見下し食らい合う。昔とあいもかわらず・・・だが、お前は違う——お前は、小さな者のために泣いてやる事が出来る。私からみれば愚かなことだが、他人のために泣いてやるなど一国を滅ぼせる私にとってなかなか出来ぬことぞ」

王女は、笑いました。

「恐るべき力をもつ竜よ——無慈悲なおかたよ。私は、確かに愛されていましたが前にもいいました通り生まれてからずっと塔におりましたゆえ、無垢なのでしょう。無垢で無知な愚かな娘なのでしょう。貴方さまが私に感心してくれたのならお言葉をお返ししますわ。だって、貴方さまは、哀れなトカゲを救い——砂漠の生き物を救ってくださったでしょう。私は、本当に感謝していますわ」

王女が、また竜に笑んで見せたので竜は顔を背けた。しまった話してしまった。情が移らぬようにと気をつけていたのに——

——竜はまた後悔しました。

竜は、姫と過ごしているうちに何時の間にか夜が来るのが怖くなっていました。

こんなにも夜が怖いと思ったことがあったでしょうか。

竜が眠れないでいると王女が傍で歌を歌ってくれることもありました。

ずっと話し相手になってくれました。

醜い背を撫でてくれました。

竜は、こんなことは今までになかったので驚きと苛立ちで夜が来るたび吼えました。国中にその咆哮が木霊しました。国の民は恐れしました。誰もが皆竜を恐れ竜と誰ももつと話したがりませんでした。竜は、何者も恐れぬ強さがありあしたがそれと同時に孤独でした。王女は少し竜が不憫になりました。王女は、竜に聞きました。

「——どうしてあなたは竜になってしまったの？」

王女は答えました。

「世界で最初に生まれた竜に呪いをかけられたのだ。北の竜が命乞いをしたのに私が己の栄光の為に殺めたから——無害な竜なのに——なのに、私は北の竜の名を辱め汚し切り捨てた。だから、世界で最初の竜は私に呪いをかけた。私は永遠にも近い年月を生きることが出来るのに——竜は私を醜い姿に変えてしまった」

王女は、竜が何度も嘆き悲しみ叫ぶのを聞きました。王女は、竜の為に泣きました。

竜は驚いて王女にいました。

「何故泣く——気分でも悪いのか？」

王女は、首を振りました。

「いいえ、私は悲しいのです。貴方の寂しさ悲しみはよく分かりません。だから、今夜この涙は誰の為でもありません。貴方の為に流します」

竜は、驚きましたが同時に幸せな気持ちになりました。王女が自分のために涙を流してくれているのです。あの時小さなトカゲのために泣いていた美しい王女は今自分のために泣いてくれているのです。王女の涙があまりにも美しいので醜く鋭い爪で王女の涙を拭いてあげました。

王女は何故だか自分の名前を始めて他人に——竜に告げました。しかし、竜にはその名を口で言う事は出来ませんでした。竜にはそんな資格はなかったのです。

何時の間にか竜の呪わした身体の中にいつも渦巻いていた。満たされない飢えと憎しみは消えていました。

しかし、この飢えが消えるのも一瞬のことです。ところが、竜の中に不思議な感情が芽生えました。その感情は前のように飢えがきても消えることはありません。

——明日は満月です。

明日——竜は王女を殺さねばなりません。

第5章

空を仰いで段々と丸くなる月を見て竜は言いました。

「あの優しい姫は、私が夜眠れぬといえば傍で歌を歌い私が眠れるまで傍で付き添ってくれる——私が詰まらぬといえば傍で物語を聞かせてくれる——醜い私の為に泣いてくれる——

——あの娘は決して一度も私を醜い獣と扱ったことはない。あの娘は私にとって特別だ。私はあの娘を食らいたくはない——しかし、飢えがそれを許さないのだ」

初めて竜は大泣きをしました。みつともないくらいに竜は泣きました。そして、言いました。

「誰でもいい——誰かあの可哀想な姫を助けてやってくれ……誰か——頼む・助けてくれ」

竜は、何度も頼みました。しかし、誰も聞いてくれません。

いえ——月だけは彼の願いを聞いていました。月は、竜を本当に不憫だと思ったので竜にいいました。

「哀れな竜よ——そして世界一幸福な者よ……私の声を聞きなさい。お前のことは見ていたよ。お前の行いは全てね。お前は初めていいことをした。王女をお前は愛して逃がそうとした」

竜は、啞然して笑いました。

「私が、あの娘を愛しているだと？——馬鹿をいうのは止める

——！！この私が——！あの娘を？？」

月はなおも続けました。

「愚かな竜よ——私の声を聞きなさい。お前は確かに娘を愛し

ている。何故ならお前は娘の為に涙を流したのだから——殺戮と傲慢しか知らぬ愚かなお前が始めていいことをしたのだ。お前の願いを聞いてやろう」

竜は、黙って月の言うことを聞いていました。竜は、確かに王女を愛していました。人間の時でさえも誰かを好きになったことはなかったのに竜は王女を本当に大切に思っていました。王女と暮らせたらどんなにいいか——しかし、それは無理でした。王子の呪いは解けるどころか王子を蝕んでいました。

「竜よ——王子よ。私の声を聞きなさい。明日王女はきっと困って私にどうすればいいか聞くだろう。その時に私はこう言おう。世界の果てにある最初に生まれた山の何者も溶かす火の中に一つ溶けていない石が欲しいと竜にいいなさいとお前はちゃんといつものように別の願いは無いか聞いて、王女のこの願いを聞いてやるんだよ。そうすれば、お前は死ぬことが出来る。そうすれば、お前は姫を殺さずにすむよ」

竜は、頷きました。王女を殺すくらいならば自分が死んだほうがマシだと思ったからです。

「ありがとう——本当にありがとう」
竜は生まれて始めてお礼をいいました。

これで明日が来ても王女は死にません。もう、自分も苦しむことはありません。

そして、次の満月の夜が来ました。

「夜の世界を照らす男神よ——父なる月よ——どうか、どうか・・・この声を聞いてくださいまし、私は貴方のお陰で生き延びることができました。しかし、今夜、私はきつと殺されてしまいます。どうか、どうか助けてください」

そう言くと王女は美しい涙を一つ流しました。

その美しい涙に心を動かされたのか、月が王女に言いました。

「哀れな美しき王女よ。私の声を聞きなさい——竜王子は貴方に別の願いはないか聞いてくるでしょう。竜にこう願いなさい。

世界の果てにある最初に生まれた山の何者も溶かす火の中に一つ溶けていない石が欲しいと竜にいいなさい」

王女は首を傾げました。しかし、月がそういうのできつと大丈夫なのでしょう。

最後に月はいいました。

「あなたに残酷さがあればあなたは生き残ることが出来るでしょう」
王女は、頷きました。自分の命が助かるならどんなに残酷になれることでしょう。

しかし、王女はあの哀れな竜に残酷になれるか少し不安でした。

王女は、腕に銀の小さなナイフを抱きました。

満月が輝く中—— 竜は月の言う通りに姫に言いました。

「命短き者よ—— 我が后になる者よ……別の願いはないのか」
王女は、わかりましたと頷くと言いました。

「心が氷のように冷たいお方—— そして、今夜私を殺すお方——

——世界の果てにある最初に生まれた山があります。その山は火を噴き何者も溶かす力を持っています。しかし、何者も溶かす火の中に一つ溶けていない石があるのです。私は、その石が欲しいのです」
月の言うとおり姫は、願いをいいました。この願いはきつと竜を殺すでしょう。王女の声が震え今にも泣きそうな瞳は竜を見ようとはしませんでした。

竜は、王女を暫し見つめました。王女は、もう、竜を微塵も恐れてはいなかったので近くで寄り添い竜を見上げました。しかし、王女は心のどこかで聞いてくれるはずもないと思っていました。何者も溶かす火の中に入って欲しいと願いは今から食らおうとする者の最後の願いにしては無茶な話です。聞いてくれるはずありません。しかし、竜は今までにない優しい声でいいました。

「無垢なる娘よ—— 我が后になる者よ—— お前の願いを聞き入れよう」

王女は、驚き竜を見つめました。竜の顔は穏やかで今までにないくらい優しい目をしています。

竜は翼を広げいつものように空へと飛んで行きました。

第6章

竜の翼は直に世界の果てに辿りつきました。

世界の果ては木も草もなく山々は太古の昔のように力をもち皆怒りに満ちていました。

毒の煙がたち込め赤いマグマが血潮のように流れ空には重い雲が陰気に空を多い尽くしています。

竜は、地上に降り咆哮しました。

「我は遠き国の王である！！！古来より生きるお前たちの宝を頂きに来た！！！」

山々が、怒りに震えました。

「お前の噂は聞いている————竜王がお前の話をしていたからな・・・帰るがいい愚か者めが・・・お前など私にしてみれば赤子も同然————帰るがいい。思い上がるな————命を落とすことになるぞ」

一番大きな山がいました。きつとこの山が最初に生まれた山なのでしょう。雄大さとマグマに彩られた怪しい美しさに暫し竜は魅了されました。

竜は、飛びました。

山々は怒り狂いマグマで焼けた熱い石を竜に投げつけました。何百もの熱い石が大砲のように飛んできます。もちろん避けきれずはありません。しかし、竜は恐れず進み続けました。

一つ、二つ、三つ————竜は石を避けました。しかし、四つ目は竜の大きな翼に当たりました。

竜は痛みに咆哮しました。

しかし、竜は進み続けました。

一つまた石が当たりました。ごきりと不気味な音が体の中で響きました。どうやら骨が折れたようです。

しかし、恐れも憎しみもなく王女との短くしかし楽しい思い出だけが頭を駆け巡りました。

最初にあつた時の竜を睨みつけるように竜を見据えた王女の顔が思い浮かびました。

笑っている王女の顔を思い浮かべました。

竜の翼の下でぐっすりと眠っている王女の顔を思い浮かべました。歌を歌ってくれている穏やかな王女の顔を思い浮かべました。

自分の為に泣いてくれた王女の顔を思い浮かべました。

最初に生まれた山に近づいてきました。

しかし、竜の片翼はひしゃげて飛びにくくなっていました。身体は骨は軋み、片方の目も見えませんが、

でも、竜は気にしませんでした。

竜は、山の何者も溶かす火の中に飛び込みました。最初に生まれた山が叫びます。

炎の中は熱く——いくら強い竜の鱗でも段々と溶けていきました。竜は痛みに咆哮しましたが進み続けました。竜の鱗が溶け肉が焼けようともマグマを切り裂き進んでいきます。

きつと死ぬまで止めないでしょう。竜は、どんどんどんどん進み続けます。

とうとう光輝く石を見つけました。そして、竜はすばやく石を取ると空へまた飛びました。

竜が石を山から取ると山は死にました。マグマは固まり毒のガスは消えました。重い暗い雲は消え青々とした雄大な空が見えました。

竜は、倒れました。

手にはしっかりと石が握られています。石は、ダイヤのように輝き神聖な光を放っています。この輝きを見せたら王女はどんな顔をするだろう。

竜は笑いました。きっと驚く——そう思うと竜は最後に王女の顔が見たくて見たくて仕方ありませんでした。今から戻ればきっと日の出あたりには王女のいる城へ辿りつくでしょう。

竜はぼろぼろの翼を動かしました。痛みで何度も血を吐きました。でも、平気です。もう直王女に会えるのですから。

王女は、自分が死んだら泣いてくれるでしょうか。竜は考えました。きっと姫は自分を殺すでしょう。そして、優しい姫は必ずこの醜い竜の為に涙を流してくれるでしょう。

竜は、早くつけるように翼を急がせました。もう直夜が明けてしまいます。

第7章

もう直満月が沈みます。王女は、心配で空を見上げ続けました。

「私を殺す方をどうして私はこんな気持ちで待てるのでしょうか？」

「私は一体どうしてしまったのかしら。あの方が心配でならない」

王女の中で不思議な感情が生まれました。

朝日が昇る頃―― 竜は帰ってきました。

王女は、嬉しさのあまり竜を抱きしめました。竜は体中ぼろぼろで所々火傷をしていながらも王女に石を持ってきました。石はダイヤのように輝き光を放っていました。

「王女願いは叶えた。そなたを食べてしまおうでしょう」

そう竜は冗談めいた声でそういいました。竜はもう王女を食べようとする気持ちは微塵もありませんでした。そんな竜の気持ちを王女は知るはずありません。しかし、王女は竜を抱きしめました。

竜は驚いて王女を見つめました。王女はとても柔らかくいい匂いがしました。

竜は醜い片手で抱きしめ返そうとしましたが起き上がる力もなくもう命がなくなるといふほどに弱ってしまいました。

このままでは、竜は死ぬでしょう。

そうすれば、王女は生きることが出来るのです。

王女は、暫く死にそうな竜をみると手に持っていた銀のナイフを持ちました。

この竜を殺せばきつと王女には素晴らしい未来が待っているはずで

す。幸せになれるのです。ずっと笑顔で暮らせるのです。

しかし、王女の美しい顔に浮かんたのは笑顔ではなく涙でした。王女は、銀のナイフを投げ捨てました。

そして、死にそんな竜に何度も何度もキスをしました。王女は、この哀れで醜い竜に恋をしたのです。

竜は驚いて王女を見つめました。

王女は、頷き立ち上がると大地を照らす太陽に縋るように願いました。

「どうか、どうか。美しい朝の女神よ、母なる太陽よ——この哀れな竜を助けてください。その為にならなくてもしますから」
そう王女がいうと太陽が言いました。

「私は月のようにお前の願いを聞いてやらないよ」

太陽が、そう冷たく言っても王女はなおも言いました。

「なんでもします。どうか、どうか——私の竜を助けてください」
太陽は、少し考えると言いました。

「よし、分かった。その醜く罪深い竜を助けよう。——その代わりお前の美しい目を貰うよ」

竜は醜く拉げた声で止めましたが王女は、竜が助かるならと迷わず頷きました。すると太陽は心優しき少女に心打たれたのか優しくいいました。

「お前は本当に優しい娘のようだから、いいことを教えてやろう。
瓶に水を張り私を映しなさい——そしてその水をその竜にかけておやり」

太陽の言うとおりに瓶に入った水に太陽を映しました。するとどうでしょう。水は金色に輝きました。王女は竜に金の水をかけてやりました。

竜の命を蝕んでいた傷は見る見るうちに直りました。それどころか呪いは解け美しい青年が姿を現しました。青年は精一杯の慈しみ込めて少女の名を始めて呼びました。

「セラ——」

少女は青年の方を見上げました。しかし、少女の瞳には青年の姿は映っていませんでした。

青年は、見てくれといわんばかりに手を広げ生まれ変わった自分の姿をみせました。しかし、その姿を王女が見ることはもうありません。

「我が愛しき王女よ、私の姿がやつとあの忌まわしい姿から解き放たれたのに―そなたは私の姿をみることはなく、そなたの盲目の瞳にはあの忌まわしい竜しか映っていないであろう。こんな私をそなたは愛してくれるはずもない」

王子は、項垂れました。

しかし、王女は首をふりいいました。

「貴方は、私に誰にも見るできない素晴らしいものを見せてくださいました。それだけで私はもう―この眼を失っても苦しくなんてないのです。それに、人の価値というものは姿ではないのです。そのことを私は幸運にも知っております」

そう言う王女は笑いました。

二人はしっかりと手をとりました。

それから、竜王は后と共に国を治め国は、もつともつと豊かになり人々は幸せに暮らしました。

王女が死んでから王は、また王女に最初に会った頃の竜に戻ったそうです。王女がまたこの世界に生を受け、次また会うために竜は長い旅に出ました。

きつと竜は王女を見つけることが出来るでしょう。

竜王子と不幸な王女（終）

第7章（後書き）

竜王子と不幸な王女は終わりです。

このお話は神話にあったものでたまたま見つけ気に入りお話を作らせて頂きました。

こつこつと昔書いたものやら今書いたものやらをつなぎ合わせて作っているのではどこか文が可笑しいところもあるかと思いますが笑いながら笑顔で見守ってください。

死神と少年

少年トムのお父さんとお母さんは流行り病で死んでしまった。
だから、トムはお婆さんのお家で暮らしている。

トムは悩み多き年頃だが今頭を悩ませているのは二つだった。
一つは今日の夕飯でお婆ちゃんお得意のプルーンのワイン煮が出てくるかということと

もう一つは皆から馬鹿にされることだった。

トムはチビでドジで男の子のくせに力もなかったので皆から馬鹿にされていた。

ある日——トムは指をさして言った。

「死神がいるよ」

うそつきトム——チビでドジな親なしのトム——

皆——少年トムを笑ったが一人だけ笑っていない者がいた。

死神だった。

黒いマントを被った死神は驚いてトムを見た。
トムはたいして驚きもせず死神を見つめた。

死神が言った。

—— 小僧、何故驚かない？

「だって鎌を持っていないもの」
トムは淡々と言った。

死神は自分の手を見つめた確かに鎌を持っていなかった。

—— 鎌を持っていたなら小僧は驚いたのか？

死神は言った。
トムは答えた。

「どうなんだろう？」—— 多分驚いたんじゃないのかな」

二人は黙った。

死神は姿を人間に見られたことがなかったので少し困惑していた。
しかし、トムには自分を怖がっている様子はないし何より落ち着いているようにも見える。

何百年—— 何千年と生きてきた死神にとってこんなことは初めてだったし、何より自分の姿を見られれば人間は悲鳴を上げるだろうと思っていた。少し腹立たしいように思えた。

だから、少しこの人間を脅かしてやろう。

死神は、深く被った黒いマントの下で笑んだ。

おい、小僧

実はなお前の魂を貰いに来たんだ。

こうして物語は始まった。

それは、幸せとはなんなのか探すための物語

死神と少年（後書き）

次のお話・・・全部書けるといいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0215e/>

物語とあたし

2010年10月31日14時13分発行